

藤倉水源地

秋田県秋田市
JR秋田新幹線「秋田駅」から車で25分

Fujikura Reservoir

資料提供: 1.2.4-9.秋田市水道局
出典: 3.中島工學博士記念事業会編「日本水道史」

市民の安全を守る水がめ

藤倉水源地は、秋田市内への飲料水、防火用水供給のため、明治36(1903)年に建設が開始され、明治40(1907)年に一部給水を開始、明治44(1911)年に全施設が完成した。以来、市民の水がめとして、約70年の間、秋田市民に清涼な飲料水を供給し続けた。

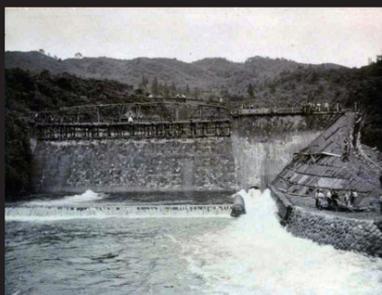
拡張工事で給水のすべてが雄物川からまかなわれるようになったため、昭和48(1973)年に藤倉ダムは取水を停止した。その後、市民からは長らく忘れられたような存在となっていたが、平成5(1993)年、国の建造物の重要文化財「近代化遺産」に全国で初めて指定され、再び脚光を浴びることとなった。

平成19(2007)年には給水を開始してから100周年という節目の年を迎えた。その藤倉水源地も、着工に至るまでには多くの困難を伴った。明治20(1887)年、横浜市で我が国最初の近代水道が給水を開始した。それを皮切りに、全国各地で近代水道が急速に広がり始めていた2年後の明治22(1889)年、市制施行に伴い、秋田市が誕生した。水道布設は市勢発展の重要課題であったが、明治19(1886)年に発生した俵屋火事やコレラなど

の伝染病の流行により、市の財政は苦しく、多額の費用を伴う水道布設の計画は遅々として進まなかった。

こうした厳しい状況の中、明治29(1896)年に御代弦(みよげん)が第3代秋田市長に就任する。秋田市に陸軍第16旅団司令部と歩兵第17連隊の移駐計画があることを知った御代市長は、衛生上のためにも1日も早く水道布設を行いたく、予算の増加を願いたい旨を県知事に上申した。明治31(1898)年、1000人を超える陸軍第16旅団司令部と歩兵第17連隊が秋田市に移駐し、水道布設は早急に取り組むべき課題となった。

明治32(1899)年、内務省土木局技師の中島鋭治が、秋田県技師の岡崎平三郎らと現地視察を行い、旭川上流の藤倉地内を水源地候補として選定した。御代市長は、内務省に度重なる請願を行うものの、国庫補助金は得られず、市の独力で着工することを決断した。総工費は51万円。明治32(1899)年当時の市予算総額が3万2千円であるから、当時としては巨額のプロジェクトであった。(後藤 文彦)



1.堤上架橋工事風景 (明治44(1911)年)



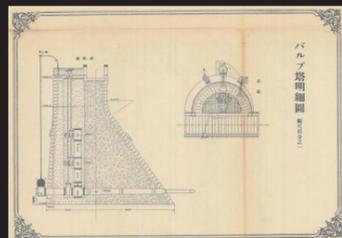
2.現在の堰堤



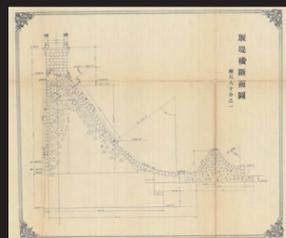
3.中島鋭治



4.水源地平面図



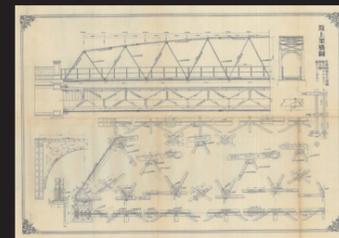
5.バルブ塔明細図



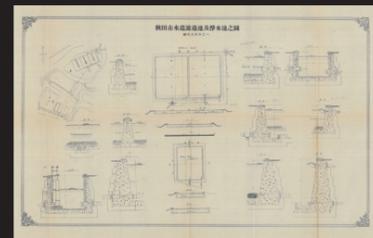
6.堰堤横断面図



7.秋田市水道市街配水管線図



8.堤上架橋図



9.濾過池及び浄水池の図

関東・甲越エリア

- HANDS 023 水戸市低区配水塔
- HANDS 024 横利根閘門
- HANDS 025 晩翠橋
- HANDS 026 那須疏水
- HANDS 027 碓氷第三橋梁
- HANDS 028 秩父橋
- HANDS 029 犬吠埼灯台
- HANDS 030 駒沢給水所
- HANDS 031 帝都復興事業
- HANDS 032 新永間市街線高架橋
- HANDS 033 地下鉄銀座線
- HANDS 034 勝鬨橋
- HANDS 035 聖橋
- HANDS 036 山下公園
- HANDS 037 掘割川
- HANDS 038 箱根地区国道1号施設群 (旭橋・千歳橋・函嶺洞門)
- HANDS 039 萬代橋
- HANDS 040 大河津分水
- HANDS 041 勝沼砂防堰堤

